

二〇一九年度 郡山女子大学 家政学部 一般生Ⅲ期 入学者選抜	
国 語	
氏名	志 願 番 号

解答は、すべて解答用紙に記入すること。

問題I

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「学ぶ」とか「学び」とかいうことは最近よく使われる。これは教育学という学問のなかで、これまでのように教える側を中心に教育という営みを考えるのをやめて、学んでいる側に視点を置いて考えてみようという主張が強くなってきたためだ。私たちは「教育」ということをあたりまえのように使っている。けれどもこのことは、最初に「教える」という漢字がきてその後に「育つ」という漢字がくるという構造になっていて、まるで「教育」なる営みは、誰かが誰かにまず「教え」なければ成立しないというような感覚——それは①サツカクといってよいものだが——を人に与えてしまうという性格をもっている。

しかし、(A) 違うだろう、というのだ。「教育」ということは教えることに重点を置いたことばだが、学ぶ側からすると、よい学びができたかどうかのほうはずっと大事なのだ。現実の学校などでは、教える側が学ぶほうに合わせるのではなく、学ぶ側が教えるほうに合わせさせられているようなことがよくある。これは (B) 本末転倒ではないか。教えるというのは、むしろ学ぶという行為を上手に支える営みであり、大事なのはあくまでも、学ぶ側がどれほど深いよい学びができていくかということではないか、というのだ。言ってみれば、「教育」といわれている営みの重点を「学ぶ」ほうに移して発想してみよう、ということだ。

(C) こうした機運が高まって、これまでのように②安易に「教育」ということばを使うのではなくて、「学ぶ」とか「学び」とかを使うほうがよいという雰囲気ができがあり、「生徒の学びを③ホシヨウしよう」などという言い方はやりだした。

しかし、(D) ことばというのは奇妙なもので、ふだん何気なく使っているときは別にその意味を気にしないのに、そのことばがなにやらキーワードもどきになつてくると、とたんに、ちょっと待てよ、このことばは改めて考えるところという意味なんだ、という疑問をもつようになる。「学ぶ」ということばもそうで、こんなことばの意味など分かってきている気がするけれども、いざ自分できちんと説明してみろといわれるとどうも明確にはできない、ということになりがちだ。

ということ、改めて聞いてみる。「学ぶ」って、いったいどういう意味だ？

( 中 略 )

新しく体験したことがそれまでの自分の「知識」と矛盾するような場合、あるいは体験がなくてその事態や物事についての「知識」がない場合、人は新しい体験とそれまでの「知識」が矛盾しなくてすむように、自分の「知識」のほうを修正して両者を両立させるような新たな「知識」をつくりあげたり、新しい体験を自分なりに納得のいく新しい「知識」につくりあげたりする。これは (E) 「知識」が高次に変容したこと、あるいは新たな「知識」が創造されたことを意味している。

こうしたプロセス、つまり、なんらかの体験をしたときに、その体験を理解し理解できるように、それまで持っていた自分の「知識」を修正し、その体験をも含めて理解できるように発展させて新たな「知識」をつくりあげたり、未知のことを体験し、その体験を何らかのかたちで総括し、教訓を導いて、自分なりに納得のいく「知識」を作り出したりすること、これを「学ぶ」と言っているのだ。名詞形が「学び」。簡単に言うと、「学び」とは体験から何らかの新しい「知識」を導き出す心身の営みのことをいう。

「学び」のプロセスは、何らかの感情の動きを伴っている。たとえば、新しい事態を以前の「知識」で理解できないでいたときに誰かから説明を受け、なるほどそうだったのかと納得し、それを取り込んで新しい「知識」を自分の中につくるとき、その人は(小さな)感動という感情を経験するはずだ。自分で調べて発見して納得し、新しい「知識」を自前でつくりあげるときも、感情の大きな動きを体験する。やったあ!というのに似た感情だ。だから、「学び」というのは、静的で冷たい心の働きではなく、動的で情的な、人間にとつてともうれい営みになるはずだ。

こう考えると、私たちは日常、たえず「学び」を経験していることがわかる。ちょっとした体験から、私たちは「こういう場合は〇〇したら失敗する」というような「知識」を日頃勝手に導き出したりしているからだ。こうした場合でも「学び」がおこなわれていることになる。ただ、「学び」にはある種の感動がともなうものであるということをおまえると、同じ「学び」にも浅い深いがあると考えたほうが適切だろう。「学び」が深いほど、感動が大きい。あるいは、「学び」が深ければ深いほど、心身に新しいものが付け加わる度合いが大きく、行動までもがそれによって変化することがある、ということだ。

「学び」の意味をこのように考えてくると、そこに必ずしも「教え」ということが必要とは限らないということが理解され

るだろう。もちろん、「教え」が深い「学び」を④ユウハツすることはあるし、そうした「教え」を私たちは期待しているのだが、「学び」にとって「教え」が絶対条件でないということを確認しておくのは大切なことだ。

と同時に、そうだとすると、(F) 私たちの「学び」の姿勢ということが大事な問題になってくる。「学び」は体験から新しい「知識」を導き出す営みだから、体験からどれだけ深い「知識」を導き出せるかということが、私たち自身に問われるようになるからだ。

私は大学生のとき、先輩の学生とある講演会を聞きに行ったことがあった。そのとき、講演がつまらないものと思われて、その先輩に「たいしたこと言ってませんね」とつまらなそうな顔をして言った。するとその先輩は私に「そんな姿勢で話を聞いてはいけないよ。(G) どんなつまらなさそうに見える話でも、こちらの姿勢次第では学べることもあるんだ」と言って私をいさめたのだ。

若い私はこのことばになるほどと思うとともに、瞬間ガンときたのを今でも覚えていて。そうか、こちらのアンテナの立て方で、ちよつとした体験からたくさんのお話を学べるのだと、そのときとつさに⑤サトつたのだ。ひよつとしたら、上手に生きる人というのは、小さな体験から本質的なことを深く「学び」とれる人なのかもしれない。生きることは「学び」の質や深さに支えられる面があるのだ。

( 汐見稔幸 『学び』の場はどこにあるのか 岩波ジュニア新書 二〇〇二年 )

【一】傍線部①～⑤のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して書きなさい。(各二点)

【二】二重傍線部(A)について、筆者は何に対して「違う」と言っているのか。次の文章の空欄にあてはまる適切な部分を本文中から二十一字で抜き出して答えなさい。(四点)

「教育」というものは 1 「ものだ」という考え方。

【三】二重傍線部(B)の意味として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。(二点)

ア 激しい苦痛などでひどく苦しんで転げまわること。

イ 文字や言葉を使わなくても互いの心と心で通じ合うこと。

ウ 物事の根本的なこととそうでないことをとり違えること。

エ 名ばかりが立派でそれに見合う実質が伴わないこと。

【四】二重傍線部(C)について、それはどのような「機運」か。本文中の言葉を使って説明しなさい。(五点)

【五】二重傍線部(D)について、筆者はことばのどのような点を「奇妙」だと言っているのか、わかりやすく説明しなさい。(五点)

【六】二重傍線部(E)はどのようなことを述べているのか。次のア～エの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。(三点)

ア 新しい体験と矛盾しないように今までの知識を修正して新しく作り上げること。

イ 新しい体験を積み重ねていくことよって今までは別の新しい知識を得ること。

ウ 新しい体験と矛盾する知識をすべて捨てて新しい知識だけを得ようとする事。

エ 新しい体験を自分なりに納得のいく形に変化させて今までの知識に合わせる事。

【七】二重傍線部(F)について、筆者がこのように述べるのは、「学び」をどのようなものだと考えているからか、本文中の言葉を使って分かりやすく説明しなさい。(五点)

【八】二重傍線部(G)とほぼ同じ内容について述べている部分を、この後の文中から抜き出して答えなさい。(五点)

## 問題II

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日本の伝統的な考え方では、質素は美德であり、浪費は恥すべきことであった。もちろん、誰もが質素な生活をしてきたかどうかはわからない。江戸の暮らしなどをみると、案外人々は浪費的な生活をしている。ところが、それでもなお人々は、華やかな生活に背を向け自分の道を探し求める人たちに、尊敬の念をもっていた。(A) 経済的利益ばかりを追求する行為を、さ ましいことと見下す心情をもっていた。

この伝統的な考え方は、消えそうでも消えなかったような気がする。バブル経済が①乱舞した時代にも、多くの人々が当時の風潮を冷やかに見ていた。今日では、経済の活性化は必要なかと考えている人が、どれほど多いことだろう。そればかりか、二十一世紀に入って、私たちの気持ちはほとんど経済から離れていくような気さえする。経済に②ジヨウネツを燃やすことに厭きた、とでもいうように。

(B) 現代世界の矛盾のひとつは、このことと関係しているのではなからうか。経済はグローバル化している。グローバル化とは、世界共通の市場が③ケイセイされるばかりでなく、(C) 主導権をとった国の経済システムが、世界標準になっていく、ということでもある。一九八〇年代には、日本の生産システムが世界標準になりかかった。つづいて九〇年代になると、アメリカ的経済システムが世界の主導権を奪った。このような過程を経ながら、世界は均質な経済圏を確立していく。

ところが経済システムは国際化しても、経済に対する人々の考え方は、④風土の違いによって異なる。ここには、風土のなかで育まれてきた伝統的な考え方がある。より多くを消費することに豊かさを感じる風土もあれば、日本のように、浪費を美德とは思わない風土もある。いわば、経済と人間の関係は、ローカル性をもちつづけているのである。

その結果、グローバルに展開していく経済と、ローカルにしか成立しえない経済への人々の対応の仕方が、つねに不調和を生みだす。なぜなら、グローバル化していく経済システムの倫理は、主導権をとった国の経済倫理の国際化としてつくられる以上、それ以外の風土が育んだ経済倫理と (D) 調和しえないのである。そして、そのことに私たちが気づきはじめてのが、今日だといってもよい。

もしかすると (E) 「豊かさ」とは、自分の暮らしている風土が生みだした経済倫理と結びついているのかもしれない。だから日本では、多消費だけでは豊かさを実感できない。日本の社会では、豊かさを感じるためには、有意義に働き、有意義に暮らしているという確認が必要であり、経済はそのための手段でしかないのだから。その結果、有意義な労働と生活のためには、ときに経済的利益の追求に、冷やかな態度をとった。

それは次のように考えればよいのだろう。人間には、自分の人生に対する了解の仕方がある。いわば了解できる人生を手にかけているという感覚が、豊かさを感じさせるのである。ところが、その了解の感覚は風土によって異なる。だから、自分の暮らす風土が育んだ感覚と一致しない基準では、私たちは何となく豊かさを理解できない。そのことが、豊かに暮らしているはずなのに、何となく豊かさを感じとれないという、今日の私たちの状態を生みだした。それは今日の豊かさの基準が、アメリカ的多消費にもとづいていて、私たちの風土が生みだした基準ではないからである。

私にはこれから、(F) この問題がますます (G) 顕在化していくような気がする。経済はローカルな風土と結びついていたほうがよいと、これからの人々は発言し始めるかもしれない。経済が豊かさの手段であり、その (H) 豊かさの基準がローカルなものだとすれば、経済の単純な国際化は、何か違ってしているのである。そして実際今日の私たちは、経済の国際化には一定の⑤セツドが必要だと思いはじめている。

( 内山 節 『里』という思想 新潮社 二〇〇五年 )

【一】傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。(各二点)

【二】二重傍線部(A)について、筆者がそう考えたのはなぜか、本文中から抜き出して答えなさい。(五点)

【三】二重傍線部(B)について、本文の内容に即して簡潔に答えなさい。(五点)

【四】二重傍線部(C)は、経済がどうなることを意味するか、本文中の語句を用いて答えなさい。(五点)

【五】二重傍線部(D)「調和」という語句を、本文と同様の意味で使用した短文を作成しなさい。(四点)

【六】二重傍線部(E)について、日本の社会における豊かさとはどのようなものであるか、答えなさい。(四点)

【七】二重傍線部(F)はどのような問題か、答えなさい。(四点)

【八】二重傍線部(G)「顕在」の対義語を次の中から一つ選び記号で答えなさい。(三点)

ア 潜在    イ 表出    ウ 内面    エ 特殊    オ 深化

【九】二重傍線部(H)で、本文に即して豊かさの基準についてのあなたの考えを二〇〇字程度でまとめなさい。(二十点)

解答用紙

氏名	国語	二〇一九年度 郡山女子大学 家政学部 一般生Ⅲ期入学者選抜
志願番号		
得点		

問題Ⅰ

【八】	【七】	【六】	【五】	【四】	【三】	【二】	【一】
						「教育」というものは          ものだという考え方。	①
							②
							③
							④
							⑤
5点	5点	3点	5点	5点	3点	4点	10点

問題Ⅱ

【八】	【七】	【六】	【五】	【四】	【三】	【二】	【一】
							①
							②
							③
							④
							⑤
3点	4点	4点	4点	5点	5点	5点	10点



氏名	二〇一九年度 郡山女子大学 家政学部 一般生Ⅲ期入学者選抜	
国語		
志願番号		
得点		

問題Ⅰ

【一】	①	錯覚	「教育」というものは	け	誰	あんい	③	保証	④	誘発	⑤	悟
	れ			立								
【二】	ウ											
【三】	ウ											
【四】	今まで教えることを中心に考えられてきた教育を学ぶほうに重点を置いて考えようという機運。											
【五】	自分でわかりきっていると思つてのことばの意味も、いざ説明しようとするとき明確に説明できないことがあるということ。											
【六】	ア											
【七】	「学び」は、体験から何らかの新しい知識を導き出すことであり、体験からどれだけ深い知識を導き出せるかが重要であると考へているから。											
【八】	(小さな体験から本質的なことを深く「学び」とれる。(アンテナの立て方で、ちよつとした体験からもたくさんの方が学べる) でも可)											

問題Ⅱ

【一】	①	らんぶ	日本の伝統的な考え方は、質素は美徳であり、浪費は恥すべきことであつたから。			
	②			情熱		
	③				形成	
	④					ふうど
	⑤					
【二】	日本の伝統的な考え方は、質素は美徳であり、浪費は恥すべきことであつたから。					
【三】	グローバルに展開していく経済と、ローカルにしか成立しえない経済への人々の対応の仕方が、矛盾を生みだしていること。					
【四】	グローバル化すること。					
【五】	「調和のとれた」など					
【六】	日本の社会において豊かさを感じるためには、有意義に働き、有意義に暮らしているという確認が必要であるということ。					
【七】	豊かに暮らしているはずなのに、何となく豊かさを感じとれないということ					
【八】	ア					

3点 4点 4点 4点 5点 5点 5点 10点